広報
いさ
二〇二二、九
ISA City Public Relations No.331
だるま狂言
大工の落書

だまの狂言 大工の落書

――時は永禄2年（1559年）8月11日、群雄割拠の戦国時代。山々に囲まれた伊佐の郡山八幡神社に、2人の宮大工が座主への愚痴を書き残した。まさかこの落書きが、後の世で日本最古の「焼酎」の文字となろうとは、本人たちには知る由もない。

令和4年8月11日の神社境内で、西上寛樹さん（地域おこし協力隊）の手により、狂言として現代によみがえった物語。演じたのは、伊佐で活動する「演劇集団非常口」の俳優たち。463年の時を越え、酔いの舞いが私たちを戦国の世に誘う。これは夢か現か、今宵はみなで飲み明かそう。

歴史の旅に、さぁ参りましょう!!

大工の落書とは

昭和29年（1954年）に郡山八幡神社の修改築が行われた際、本殿北東の柱貫から文字が書かれた木鼻が発見されました。そこには、永禄2年（1559年）の日付と宮大工の名前、「座主が焼酎を飲ませてくれなかった」ことへの恨み節が書かれています。

この「焼酎」の文字は、記録上日本最古のものであり、450年以上の昔から薩摩に焼酎文化が根付いていたことを証明する貴重な歴史資料になっています。

永禄二歳八月十一日　作次郎
鶴田助太郎
其時座主ハ大キナこすてをちやりて一度も焼酎ヲ不被下候
何共めいわくな事哉

〈訳〉
永禄二歳八月十一日　作次郎
鶴田助太郎
その時の座主は、大のけちん坊であって、一度も焼酎をふるまってくださらなかった。
何と迷惑なことか

あらすじ

永禄2年、郡山八幡宮の改修工事に大満足の座主。大工の助太郎・作次郎を労うものの、「大工は決まって大酒飲み」とあって焼酎を出さないことを決意。だれやめを楽しみにしていた2人は、あの手この手で座主におねだりするが、座主は帰ってしまう（写真二）。苛立ちから2人の間で喧嘩が勃発。取っ組み合いの末、柱貫の木鼻を外してしまう…（写真三）。

二

三

四

我に返った2人。しかしどうしても焼酎が飲みたい。そこで2人は「あるつもりで飲もう」と空（から）の酒盛りを始める（写真四）。これがことのほか良い酒となり、すっかり酔いの体（てい）で小舞を披露（写真五）。盛り上がった2人は外れた木鼻の裏に座主の悪口を書く（写真表紙）。

五

そこに座主が焼酎を持って戻って来て、めでたい日に焼酎を出さなかった失礼を2人に詫びた。すでに悪口を書いてしまった2人は大慌て（写真六）。なんとか座主に気づかれないよう木鼻を元の場所に戻す。その後、3人は伊佐焼酎でだれやめを楽しんだのだった（写真七・一）。

めでたし

六

七

※朝・夜の２回公演。会場の雰囲気の違いもお楽しみください。

天地の恵みとともに
くらが夫々である

だわやわの界
心得た
献灯
心得た
献灯
八幡神社

もっと知りたい!!

焼酎談議

氏子総代会会長の岡下臣廣（たみひろ）さん、渕之上酒店の渕之上俊典さんが登壇して、落書きのこと、当時の時代背景などを深掘りしました。これを読めば、きっと焼酎がさらにおいしく感じることでしょう。

西上
落書が書かれた1559年は、どんな時代だったのでしょうか？

岡下
室町末期になります。1560年の織田・今川の桶狭間の戦い、1561年の上杉・武田の川中島の戦いというように、まさに戦国の世。地元でいうと、島津氏と菱刈氏、相良氏が勢力を争っていました。

西上
戦国と聞くと、常に戦（いくさ）をしているようなイメージを持つかもしれませんが、神社の改修工事を行ったり、座主の悪口を書いたり、お金にも心にも余裕があったことが想像できますね。

岡下
狂言に出てくる座主は、お坊さんのことです。「神社なのに、なぜお坊さんがいるの？」と不思議に思った方もいたのでは。これは神仏習合と言って、明治初期まで、お坊さんが神社でもお経をあげていました。古文書には、郡山八幡神社鳥居の左側に郡山寺という別当寺（※）があったと記録が残っています。歴代の郡山寺住職のお墓を調査したところ、年代的にケチだと書かれた座主は「照源（しょうげん）」さんではないかとわかっています。

おや、いまごろ地下の方から「おいじゃねぇど（私ではないよ）」と言っているかもしれませんね。

（※）神社を管理するために置かれた寺

―会場大笑い―

西上
渕之上さんは、作次郎たちが飲んでいた焼酎とはどんなお酒であったとお考えですか？

渕之上
私は、おそらく米焼酎だろうと考えています。焼酎はデンプンさえあれば、どんな作物からでも造ることができます。当時主に食べられていた穀物は米、アワ、ヒエなどですが、米がいちばん蒸留しやすいんです。

海音寺潮五郎先生の作品にもそれと推測できる描写があったり、昭和12年発行の列車新聞に純米焼酎の広告が掲載してあったりすることも、米焼酎と考える根拠です。

「現在の伊佐焼酎と同じように、芋焼酎じゃないの？」と考える方もいるかと思います。芋は江戸中期になってから日本に入って来たので、時代的にありえないのです。

西上
では、そんな焼酎文化はどこから来たのでしょうか？

渕之上
アルコールを温めて湯気にし、それを冷やして液体に戻す蒸留技術が伝えられたのは、アラビアからとも、琉球からともいわれています。個人的には、琉球王朝の泡盛を参考にしたのではないかと考えています。

西上
琉球やアラブに思いを馳せることができるなんてすごい！おいしい焼酎の飲み方を教えていただけますか？

渕之上
最近だと、水割りやお湯割りが一般的ですね。私が本当にうまいと思う飲み方は、「前割り」です。焼酎にお好みで水を足し、それを1日置きます。次の日に湯煎して、ぬる燗で飲むのが最高です。ただ、とても面倒くさいのであまりオススメしませんが…。

―会場大笑い―

西上
郡山八幡神社では、手水舎の水場を竹で作ったり、社殿を朱色に塗ったり、みなさんでDIYした部分が多くみられます。そこにはどんな思いがあるのでしょう？

岡下
できる範囲で地域のみんなで管理する姿勢を大切にしています。このような活動が文化財への愛着心を育み、地域の財産を次の世代に守り伝えることができると思っています。
これからもみんなでこの神社を守っていきたいと思います。
（了）

公演を終えて

西元 麻子さん（座主）
私自身も狂言に馴染みがなく、みなさんが笑ってくれなかったらどうしようという不安もありましたが、たくさん笑い声が聞こえて、楽しく演じることができました。

川村 美由喜さん（霜田助太郎）
観客のみなさんやさしくて、たくさん笑って拍手をくださりうれしかったです。はじめての狂言で緊張もありましたが、楽しむことができました。

石神 朋子さん（作次郎）
たくさんの方にお越しいただき感謝の気持ちでいっぱいです。私もますます焼酎が好きになりました（笑）

島田 佳代さん（後見）
みなさんに笑っていただき、とても幸せな気持ちになりました。

河野 佑紀さん（和泉流狂言師）
伝統芸能である狂言は、所作やセリフの抑揚など「おいそれ」と簡単にできるものではありません。それをこうして地域のオリジナル狂言として生みだしたみなさんが本当にすごいです。
神社の静けさにも神秘性を感じ、とても風情のある素敵な舞台でした！

西上 寛樹さん（作・演出）
伊佐って本当に面白い町だと思います。伊佐にはおいしい焼酎がある、物語がある、そして演じる劇団もある。いろんな人や時代に思いを馳せながら、みんなで楽しく焼酎が飲めるって、なんて豊かなことでしょう！
公演が終わって社殿裏に捌（は）ける演者3人をみた子どもが「あの人たちはここに住んでいるの？」と、お母さんにたずねていたんです。あの子には、本物の座主と大工に見えたのでしょうね（笑）。これが現地の舞台で演じる醍醐味だと、すごくうれしかったです。お客さんが楽しんでくれてこそ、演者も裏方も報われるんです。
この狂言が地域に愛され、今後も続いていけたらいいなあと思います。